

アラビア半島イエメンの山旅

--- アッサラ ム・アライクム/シュ克蘭/マアツ・サラーム ---

(こんにちは/ありがとう/さようなら)

(2007年5月の記録)

高田忠雄

日程：2007年5月15日(火)～5月25日(金)

参加者：高田良一、高田忠雄

アラビア半島南端のイエメン共和国で、歴史人物「シバの女王」以外、何も知らない国。ちょっと見てたら、かつてはインドと地中海を結ぶ「海のシルクロード」として栄え、インドのスパイス、中国の絹、アフリカの宝石、イエメンの乳香等、さまざまな品がこの地を経由し、ヨーロッパへと運ばれたと～。大国に支配され、内乱を繰り返し、今は「アラブの最貧国」といわれるが「アラブ文明の発祥の地」とされ、古き良きアラブの習慣を大切にしながら数千年を生きて来たとある。「イエメンに登るに値する山なんてあったんかいな？イエメン高原は3,000メートル級の山が連なる」と～。興味と「冥土のみやげに行こう！」と決めたものの、アラブ・イスラムは、イスラエル紛争やイラク戦争後、特に危険でイスラム武装組織の支配地域や、部族間抗争地域では誘拐・テロの危険情報と、町の治安は良くスリや置き引き窃盗の犯罪がない。欧米より街は安全に歩ける【*後記1-つるされた手】等ネット情報が交錯するなか、高(長)さんは「今回行くところは大丈夫！」と太鼓判。

5月15日(火)～16日(水)

中部国際空港 22:45 --- ドバイ(アラブ首長国連邦) --- サナア国際空港(イエメン共和国)
9:30 --- サナア(標高2,400メートル)(日本-イエメンの時差6時間)

Emirates 航空は、アラビアの王様の会社で世界一サービスの良い航空会社とのこと。最新のジャンボ機、小ポシェット(歯みがきセット/アイマスク/くつ下)のプレゼント付。ワイン・ビールのサービスで快適だった。サナア空港は広いが建物は小さく簡素。ビザの申請(日本で言うより安価で簡単)と入国審査も簡単に終わり、ドルをイエメンリアルに両替(1ドル=198リアル)。空港外に出ると「灼熱の太陽」が眩しく乾燥しきっているのだから暑くは感じない。長さんが、5年前に雇ったガイド運転手「ヤヒヤさん」に電話したが不在。

タクシーでサナア市内へ向かう(料金は交渉制で1,000リアル前後)。道路は広く市内に近づくと渋滞した。約30分でサナアの中心地「タハリール広場」へ。とにかく人がいっぱい歩いていて、それも男性ばかり。男性の半分程は、ターバンにアラブの衣装、腰の前に短剣、ゾウリ履、ひげ面。男どうし手をつないでいる者がいて「え！何でや？」。女性の姿は圧倒的に少なく、すっぽりと黒ベールに黒ブルカ(黒いロング服)で背が高くスタイル姿勢良く足早に歩いていた。すぐ近くの小さなホテルへ入った(1,700リアル)。ホテルの窓から街を見ていると、モスクのドーム、高いミナレット(尖塔)、拡声器のイスラム礼拝コーラン、茶色い石造りの建物、ターバンに短剣の男達、黒ブルカの女性、道路を覆う露店、異教の国イエメン 日本から遠かった～。

ホテルからちょっと路地に入ったところのトレッキング事務所へ。「イエメンホリデーツアー・アミン」とカタカナで書いた小さな看板があった。事務所といっても自宅で、石と土の壁に鉄の片扉で、この辺みな同じ家が並ぶ。中は土臭くて暗くて狭い階段で2階へ案内された。アミンさんは、細身の

ちょっと、ヒッピー風で細々と営業している感じだった。旧式パソコンのネットに日本語画面を出して彼は「アミン」だけ読めるので、そのへんの内容だけ、長さんに英語訳してもらって自分の「誉め言葉」が載っていると満足そうに微笑んだ。5年前の、長さんのガイド「ヤヒヤさん」とは商売ガタキ。仲が悪そうで「ヤヒヤは評判が良くない」と言いつつ連絡を取ってくれて、長さんと5年ぶりの再会となった。ヤヒヤさんの親戚の「モハメドさん」が私達の英通訳兼運転手。2人とも例のアラビアン・スタイルで短剣、なかなかの貫禄で、もしことが違っていたら、ちょっとビビリそう。

イエメンでは遺跡/高原コース等、欧州人のトレッカーは多いらしい。登山は、アミンさんも余り扱っていないと言う。「英通訳兼運転手5日間300ドル」で成立。登山ガイドは麓の村人を雇うことにした。アミンさんから、明日からの行程と登山情報を得た。世界遺産で、世界最古の町といわれている「旧市街」を散策。バーバルヤマン(イエメン門)を入るとすぐにスーク(市場/店)が並ぶ。2,000年以前から塩市場として栄え、今は細い路地の両側に何百もの小さな店がありとあらゆる商品を店先に並べている。衣服、食料品、香辛料、装飾品、絵画、木工品、金銀製品、コート【*後記2 - コート】等。店人が「ヤーバーニー?(日本人?)アッサラ ム!」と大声をかけてくる。「アライクムッサラ ム」と答えると「ヤーバーニー、グッド!」みんな陽気で愛想がいい。スークを外れると、静かな路地に石と日干しレンガで造られた家々が立ち並び、窓は白い漆喰にステンドグラスのような飾り窓が付けられていてお菓子の家の様にも見える。路地で子供達が遊び、黒ブルカの女性が足早に歩いて行く。何んか、違う時代に來たみたい。



ホテル近くのレストラン(地球の歩き方にも紹介)で食事をした。チキン、ヤギのミート、野菜煮込み、スープ類、フライ類、ライス類、パスタ等、ショウケース越しの注文式で、いっぱい注文して食べたがどれも「こんなもんか~」。値段は2,300リアルと高く「ボラレたか?」。ちなみにこの先このレストランでも同じ程度であった。全く酒類は売っていないので、ホテルに戻り熱いシャワーの後は「ビール」とは行かず、持参のウィスキー、焼酎、日本酒をゆっくり楽しんだ。外は激しい雷雨でびっくり!こんな天気になるんや~。

5月17日(木)晴、一時雷雨

サナア --- マスード〔ジャビルカニン(標高3,244メートル)登山〕の予定だったが、ガイド拒否され中止 --- ダマール --- ヤリム --- イップ --- ジブラ(標高1,900メートル)

7:30アラブの衣装短剣姿で「モハメドさん」が迎えに来て出発。9:00マスードの村に到着。日干しレンガの家と狭い道、およそ車が入る所ではない。子供達が珍しそうに集まってきた。大人がいない~青年2人が近づいてきて、モハメドさんと話しているが何か様子が良くない。「山に軍の施設があるので登れない。山道が無い」と言う。アミンさんから「軍の施設はあるが1,000リアル渡せば通してくれる」聞いていたし、登山ルートはGoogleの写真とGPSで明確だと2人に説明したが「2人は行く気なし」では仕方がない。諦めて予定変更。今日はジブラまで南下することにした。

大通りに出て車は快速に走る。トヨタ製のランド・クルーザーだが外仕様と内仕様が合ってなくて寄せ集め部品車の様なオンボロだがよく走る。大通りで最初の検問。イエメンでは何箇所も装甲車や機関銃を装備した軍人やポリスがパーミット(許可証)を確認する。もし私達だけならそう簡単でない雰囲気を感じるが、モハメドさんと同乗で「ヤーバーニー/トレッキング/ホリデイ」でOK!だった

た。

12:00 ダマールのレストランで昼食。やはり同じメニューで余り美味くなかった。13:30 イップの町を散策。賢そうな顔をした少年にガイドを頼んだ(500リアル)。モスクのミナレット(尖塔)の太陽の彫刻やステンドグラス窓、イスラムの彫刻像、ユダヤの絵文字の扉(この地にもユダヤの歴史がある)等、路地裏を歩いていると彼らの生活を感じる。彼の学校の先生が描いた油絵のギャラリーへ案内してくれた。いっぱい展示されていて「これが男の先生、ここが女の先生の作品」と~。床に置いてあるのもあり、増築工事中だったので、多分これから展示されると言っている様だった。それにしても言葉が通じないのによくここまで来るなあ~と自分ながら思う。

14:30 ジブラに到着。ジブラの町を散策。2青年にガイドを依頼(1人でええのにお調子者がついて来たので1,000リアル払ってやった)。特に観る所は無かったが、300年からの古い建物は永い歴史を感じる。青年の家に招かれシャーイ(イエメン紅茶)をご馳走になった。彼らやお父さんは、せっせとカートを噛んでいて頬が大きく膨らんできた。テレビがあり、コマーシャルでスペイン系?の女性が映ると「セニョリーター!エキサイティング!」と大声ではしゃいだ。私が手振りで「ポイン!ポイン!ユーライクグッド?」とからかうと「ポイン!ポイン!グッド!エキサイティング!」とはしゃいで照れた。彼らは家族以外の女性の顔身体は見られないからテレビの女性は刺激的なんやろ~。下ネタは万国共通でした。16:00 ホテルに入った(2,500リアル)。

5月18日(金)晴、雷雨、曇

ジブラ --- タガール〔2,450メ-トル、ジャビル・タガール(標高3,100メ-トル)登山] --- アルカイダ --- タイズ(標高2,400メ-トル)(註:ジャビルとは山のこと)



7:20 ホテル発。8:45 タガール村着。ガイドは19歳のアマーズ。9:00 村を抜け農道を小高い丘に向かって登る。周囲は全部段々畑。アマーズは最初堅かったが、葉草花や何か説明してくれたり、展望の良いポイントへ連れて行ってってくれたりして、分かったふりして笑顔になって互いに心が通じてきた。道の無い段々畑に踏み込んで登って行ったが、よそ様の土地でアマーズ無しでは歩けないやろ。途中、湧き水の溜まりで野草?野菜?を洗っている黒ブルカの女性がいて「農作業もこんな姿でやるの、これ草?野菜?

食べられるの?」と聞いたが無言。「どうしようも無いな~中身男でも分からんな」と言ったところで声を出して笑った。初めてイエメン女性の声を聞いた。しわくちやの老婆がいっぱいポリタンをぶら下げて水を汲みに来た。イエメンではお婆さんになると顔は覆わないようだ。驚いたのは棚田には鋼管・塩ビ管でどこへでも配水してある。こんな高地でも水は豊富で、アラブの最貧国でも農作物は採れ、ヤギに鶏、食うには困らへんのやなあ~。

稜線に出て見下ろすと麓まで見事に緑の棚田が続いて木に囲まれた村。ここは平和なオアシス。稜線からは日本の山と変わらない雰囲気。低くて小さい木、草、花、鉄砲ユリの群生もあった。2つの山頂部が見えてきた頃から石組の建物跡が幾つもあり、昔は城塞村で人が住んでいたのか。1つ2つとちゃんとした石の建物があり1つ目のピークに1人の青年が立っていた「アッサラーム!」。ここで1人で住んでいると。「え~!こんなとこで何やってんの?」物静かな青年で、アマーズとは友達らしい。2つ目のピークまで一息。青年も一緒に登って来て11:30



着。狭い岩場で360度の大パノラマ。大きなお椀型のピークが2つ、秋田・岩手県境の乳頭山によく似た良い山だった。クッキーにスライスチーズをはさんで2人にやると、ちゅうちょしたが美味そうに食った。11:50青年と別れて下る。アマーズとはすっかり打ち解け、アラビア語と関西弁と手振り身振りで「多分こう言ってるんやろ～」で会話？ふざけ合った。途中ぽつぽつ雨と遠くで雷～やばいなあ！～運よくトタン小屋があり避難できた。猛烈な雷雨となった。本当にタイミング良く安堵した。

13:30村に戻る。お父さんが出迎えてくれて食事をご馳走になることに。アマーズ家はヤギの放牧で裕福そう。男7人女5人の兄弟姉妹でアマーズは妻も子供もいるという。「こいつやるな！嫁さんは1人にしとけよ！」とからかうと大照れで笑い通じている？みたい。シャーイ（イエメン紅茶）、トウモロコシを練った主食、平たいパン、酸っぱいヨーグルト、トマトスープ、チキン、ライス。お父さんは口いっぱいほおぼって美味そうに食べている。ちょっとずつ口にしたが食べるのには勇気がいった。それでもパンはモチモチでトマトスープをつけるといけた。14:00村を出発時、彼の兄弟達や村の子供達がいっぱい出てきて見送ってくれた。お母さんはチラッと見たが、彼の嫁さんや姉妹は奥のカーテン越しから「そ～っと」見ているだけだった。家の中では赤や黄色の綺麗な柄のブルカ姿で、黒ブルカは外出時だけらしい。みんな本当に人が良くて可愛らしくて純粋やったなあ～。

15:30テロ首謀者ビンラディンの故郷アルカイダの町に入る。アル（城塞）カイダはビンラディンが名づけたと。日干しレンガの建物、人の密集、埃、ゴミの散乱、豊かな町とはほど遠い感じだった。今日も途中ものすごい雷雨。16:00タイズの町に入った。露店街を散歩したが溢れんばかりの品が並べてあった。17:30今夜は5つ星ホテルに泊まることに（12,000リアル）、標高2,400メートルの高台にあり、客室や屋外レストランからのタイズの夜景が売り。私達には灯り不足だが彼らには最高の夜景なのだろう。

ホテルまでの急坂道路には車列が並んでいた。レストランはビールも無く食事はやっぱりたいしたことなかった。女性は黒ベールのままノド部分の間から飲んだり食べていて「あれどうにかならへん？」とストレスを感じる。5つ星ホテルのバスは湯がぬるくて期待外れ。安ホテルでも熱いシャワーの外れはなかったのに。持参のお酒がありがたかった。

5月19日（土）晴、雷雨

タイズ --- ジャビル・サビル（標高3,050メートル） --- アルカイダ --- ヤリム（標高2,700メートル）

8:15ホテル発。車で登れるジャビル・サビルへ向かう。オンボロランド・クルーザーはカーブの急坂で登り切れず、一旦バックしてギアを入れ替えての登りを繰り返す。山頂部は軍の施設で立入禁止だが手前の広場（標高3,000メートル）からの大展望は本当に素晴らしかった。山肌に貼り付くように石と日干しレンガの家がびっしり並び、残りは全て緑の棚田。遙か下方は森に囲まれた村落。ここはマチュピチュやないか！いやマチュピチュは古き遺跡だが、ここは2,000年以前から今も人が暮らす歴史～。とにかく凄と思った。



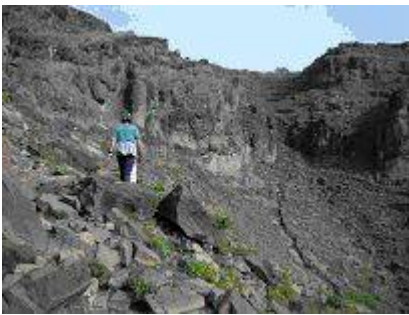
引き返してヤリムへ向かう。11:00アルカイダの町を通過。幹線道路は広くさらに拡幅工事中も多く、中央分離帯の街路灯の全部にサーレ八大統領の写真ポスターと国旗が揚がっていて「こういう国なんか～」。山肌や台地に立つ城塞村、峠、荒涼とした砂漠、人とホコリとゴミの街、棚田の緑と静かな村、豊富な品のマーケット通り、厳重な検問、対向車がぶつかってきそうなサーカス運転（ク

レイジー！）3～4人も乗っているオートバイ、落っこちそうに大勢乗っている車、ひた走り～13：30ヤリムの町に着いてレストランで昼食、とにかく空きっ腹を満たして、15：00ホテルに入った（2,000リアル）。熱いシャワーの後ウィスキーが胃にしみる。16：00頃からまた激しい雷雨。

5月20日（日）晴

ヤリム --- アップ〔ジャビル・アル・クラ（標高3,230メートル）登山〕 --- ダマール（標高2,500メートル）

6：10ホテル発。7：10アップ村着。ホコリとゴミの街と違って、緑豊かな田園風景はオアシス。大人も子供達も大勢集まってきて「チャイナ？コウリヤン？ヤーバーニー？オオ！ヤーバーニー！グッド！」「ヤーバーニー、フレンド、アッサラム！」と賑やかでみんなニコニコしている。ガイドは「ラフィーク」なかなか気品のある細身のイケメン。



7：30村を抜け農道から段々畑を登った後、一旦広い道に出た所で2人の村人に出会った。ゼスチャーを交えて指差して山のことを説明してくれる。足元が悪く急坂で絶壁、クライミングする身振りもして、ここからはきつい岩山道だと教えてくれているのだろう。「まあ穂高や剣ほどではないやろから、とにかく行こう！」と歩き出した。断崖絶壁が連なっているが横から巻いて裏側から登るんやろ。しばらくするとさっきの青年とは別の少年が追いついてきた。一緒に登ってくれるらしい。少年はすぐに私のザックを担いでくれた。

岩の急坂となり絶壁を左から巻いて登った。高度を稼ぎ周りは人を寄せつけない絶壁となり、見下ろすとどこまでも続く緑の棚田～森と小さな村が幾つか見える。10：50円周岩峰に囲まれ、中央が広い台地になったアル・クラの山頂部に着いた。石組の家屋が幾つもあり、畑、湧き水、ヤギ、鶏もいる。村へ入ると男性が出てきた。少年はこの村に詳しく村内を案内してくれた。人家、穀物小屋、家畜小屋、水瓶等に分かれ、石組が崩れたのも多く、昔はもっと多くの方が住んでいたと思われる。マチュピチュに人が住んでいるようだった。休んでいると村人が、イエメン紅茶、パン、ヨーグルト、トマトスープを持って来てくれた。ヨーグルト・スープはちょっと怖くて飲めなかったが、パンと紅茶は美味しかった。村人に幾らか金を渡そうとしたが、少年は「渡す必要は無い！」と強く拒んだ。たぶん「好意だから



いらぬ」と～律儀である。周囲の岩峰を一周したが足元片側は絶壁で下から見えていた所である。



12：00トップピークに着いた。狭い山頂には白ペンキの長方形の石が置いてあり、彼らは「アラー」と言った。外国から来た人は初めてだとも言った。12：10下山を始め少年を先頭に往路と違う急坂を一気に下り、彼らに出会った道に出た。2人とはお別れ。お礼に1,000リアルずつ渡した。優しくて逞しい2人だった。道からは緑の地を村へ向かってゆっくり歩いたが「登り甲斐があっ

たし、山頂部の印象も強く良い山に登れたな」～と満足しながら「こんなに歩いてきたんかいな」～と思う程、村は遠かった。14：00村に戻った。

朝より大勢の村人が集まっていてみんな賑やかで大声で話し掛けてくる。多分「山は楽しかったか」「ラフィークはいいやつだろう」とか言っている様なので、ラフィークを思いきり褒めあげるとみんな歓声！「日本人は良い友達！」彼らは日本のこと何か知っているのかいな？ちなみに、ネットによると日本（政府）のイエメンへの貢献度は、世界で15番目位とのこと。「低いなあ～。もっと貢献せんとあかんで！！」

ラフィークの家に招かれてランチをご馳走になった。彼の家は大きく部屋も明るく奇麗で裕福そうだった。イエメン紅茶・パン・塩ゆでパスタ？そうめん？を刻んだ野菜炒め等、今まで食べたどれよりも美味しく満腹になるまで食べた。お父さんと息子も同席したが礼儀正しかった。正座して手をついてお辞儀の日本式の挨拶をして感謝を伝えた。外へ出るとまた村人がいっぱい集まっていたのにびっくり。見回すと黒ブルカの女性達は、かなり離れた所から私達を見ていた。「シュ克蘭！」「マアッ・サラマ！」両手を合わせたり深々と礼をしたり、手を振ったり握手したり、いったい僕らは何なんや？「みんな本当に純粋やな！おおきに！！」

16：30ダマールの町に着きホテルに入った（2,500リアル）

5月21日（月）晴

ダマール --- サナア

7：15ホテル発。周囲に高い山は無くどこまでも平原。田畑もあり荒地もあり、建造中か壊れたのか分らない様な家屋ばかりでピンク色のビニール袋のゴミがいっぱい。官庁・軍らしき建物には国旗や大幕、サーレ八大統領の大きな写真が掲げられていた。近く大統領の訪問があるとのことと道路は軍の車列優先、軍人の姿が多く検問が強化されていた。

9：30サナアに戻ってきたが、また喧騒の街である。郊外の「ワディ・ダハール」の観光へ。広大な乾いた赤茶色の岩山と、そこから見る下の盆地は緑に溢れたオアシス。盆地にある「ロックパレス」は岩山いっぱい建つ昔の王宮。建物の内外全てが石造りで驚き感心する工夫がいっぱいされていた。当時の生活様式が分かり見応えがあった。サナア郊外の韓国レストランへ。唯一ビールが飲める店。料理の味は？？でもビールとほうれん草炒めとキムチは美味しかった。

サナアに戻りアミーさんの事務所へ。明日もう1つ山を登ることにしたので情報を聞き、モハメドさんを60ドルで雇った。16：00ホテルに戻った。

5月22日（火）晴

サナア --- アットウーラ〔ジャビル・ガワダー（標高3,200メートル）を目指すも、部族間抗争のため危険を感じ引き返す --- サナア

6：30ホテル発。サナアの町を抜けて峠を越え山岳地や大荒原を突っ走り、その間検問が3箇所。小さな町でモハメドさんが、停車中のおじさんと話していて同乗していた少年が乗り込んできた。エブラヒム君10才ちょっと位？「登山ガイドとして大丈夫かいな？」モハメドさんは「大丈夫だ！」と言った。車中から畑仕事の中の1人が自動銃を持っていた？様に見えたんやけど～。（後で現実となる）

8：30アットウーラ村着。道を外れてしばらく畑を登って行くと、遠くで畑仕事の数人が大声で何やら話しかけている。畑に入っているから怒っているのか？少年はちょっと困った様子。「何？どうしたんや！」向こうからは何か言い続けているが、怒っている様子ではなさそうだった。少年は鉄砲を撃つ格好をしてからモハメドに連絡したいと言った。「危機を直感して！」すぐ戻ることにした。村人に手を振るとみんなが応じたのでこの場は大丈夫だと思った。戻ってモハメドは「山上の村との対立抗争

でこの先へは行かない方がいい。銃で撃たれるかもしれないと村人が言っている」と。そんなことでは仕方がない。村人に出会わなかったら本当に撃たれていたかも？ 登山は中止して付近のトレッキングに変更。まずはと、アットウーラ城塞のピークへと登ったが、建物の直前で「ここからは個人の家だから入ってはいけない」と拒否され引き返して10:30アットウーラ村を出た。

11:30シバームの町とコーカバン城塞トレッキングへ。シバーム(標高2,500メートル)と、さらに350メートルの岩壁上のコーカバン。上と下に同じ部族が暮らし1,000年以上にも渡りそれぞれ役割を決めて山の上と下で助け合って生きてきたのだ。下のシバームは農業と商業の町、周辺は緑の耕地が広がり、町中を大きな道路が走る。岩壁上のコーカバンは軍事を担当し常に敵の接近を監視し、シバームが外敵に襲われると人々は山を駆け登り助けを求め、コーカバンの人々は果敢に戦ったそう。今は車でも登れるので「もう登りはええわ!下りをトレッキングしよう」と。大きなゲートがあつてくぐると、赤茶色の堅固な砦の様な石組の家が並び石組の大きな貯水地もあり、こんなカラカラ地にどこから水が湧いてくるの?町外れの岩壁に立つと眼下にシバームの町、その周りに緑が広がり、さらに地平線まで荒野が広がっていてコーラの響きと共に素晴らしい光景だった。



シバームへの下り道は、ずう~と展望が良く急坂でも良く踏み固められていた。途中、石敷き道の工事をしていた。シバームの町に下りてガイド役のエブラヒム少年ともお別れ。彼は、私達を連れ歩いて疲れた表情をしたが1,000リアルを渡してやると「ほっとした」様子だった。

サナアに戻り、15:00ホテルに入り休んだ。

5月23日(水)晴

イエメンの山旅も最終日。のんびり街を散策しながら近くの国立博物館へ。時の統治者イマームの元王宮に造られた博物館で重厚な歴史的建造物。イエメンは紀元前3,000年には国家が存在していたといわれるが、現存する記録や展示品は紀元前10世紀頃からのものである。日本と比較して想像を超える歴史、文明を実感した。

5月24日(木)~25日(金)

サナア国際空港10:05 --- ドバイ13:40~02:50 --- 中部国際空港17:40

【*1】 つるされた手

アラブでは、スリや置き引き窃盗の犯罪が極めて少ないらしい。イエメンも例外でなく、イスラム法では「盗みをしたら手を切られる」と定められているためらしい。数年前までは盗人の手が旧市街イエメン門前につるされていたそうである。そういえば、街の露店に店主がいなかったり、店前の路上に沢山の電気製品を置きっぱなしにしてあったり。ほんとに盗んでいく人いないのかなあ?

【*2】 カート

男達がコブのように片方のホオを、はち切れんばかりに膨らませて何か噛んでいるのを見て「何やあれは?」これがカートだった。カートはアカネ科の木の葉っぱで、生の葉を1枚1枚噛み砕いてそのエキスを飲み込むことによって軽い神経興奮作用が得られる。噛みかすを飲み込んだり吐き出した

りせずに片方のホオの内側に貯めていくので、固まりがコブのようになる。コブになった頃から効力が現れ頭が冴えてくるらしい。アラブでは禁じている国もあるが、イエメンでは合法的な嗜好品。カートタイムがあって、午後1時半頃になると運転手のモハメドさんも噛みだす。品質も値段も色々らしく、購入時の品定めと値段のやり取りは激しく、なかなか商いが成立しない。売り手と買い手双方とも真剣そのものだった。両手に乗るくらいの量が入ったビニール袋入りで、最低価格300リアル以上で、かなり高価な物もあるらしい。他の飲食物と比べると高価品である。

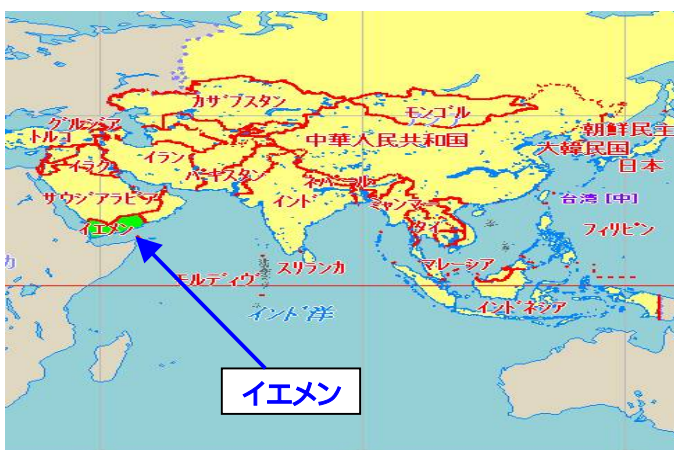
アラビア半島は、北部は岩に栄え、中部は砂漠に栄え、南のイエメンは緑に栄えた国と言われていたそうです。もっと砂漠で荒涼としたところかと想像していましたが、首都サナアからタイズへ向けて南下するごとに緑が増えて意外でした。彼らは外敵から守るために山岳民族として栄え、平地に住みつけた歴史は比較的浅い様です。山肌に貼り付くように石とレンガの家が山頂まで続き、山頂には城塞村がありペルー・マチュピチュ遺跡に人が住んでいる様でした。山の斜面はほとんど棚田で、平地も農耕地にして農作物は豊かで、貧しくも食物はちゃんとある様でした。野菜や果物はどれも美味しかったし、特に日本では高価な「マンゴー」は特産らしく、安価なジュース店があちこちにあって人がいっぱいでした。山も良かったし、広大な緑の棚田も、村の静かな田園風景も素晴らしかったし、人々はみんな純粋で律儀で、陽気で親切でした。どの街も大通りはいつも人が密集し、みんな仕事してへんの？(仕事が無いのかも?) 喧騒と、ホコリと、ゴミが散乱し車の排気ガス臭で、この国もこれからどうなっていくのか? ~と。イスラム文化と街とレストランには馴染めませんでした。富裕者層と貧しい人々、格差の激しい社会であることは一見して分かる国でした。たくさんの子供達が車道で雑品を売り歩き、あちこちにたむろしていて - 君ら学校は? 大人も青少年も彼らの「娯楽」は何なのか? 街中に娯楽を感じるものは何も無かったし、手をつないで歩く成人男性が多かったことも ~ 違和感。「イスラムの教え」が全てなのか ~ やっぱり遠い異教の国イエメンでした。



村の子供達



モハメドさんと物売りの少年



イエメン

